

人類の将来

丘 浅次郎

—

何事に限らず未来を説くのは決して容易ではない。昔から「一寸先は暗」と云う通り、次の瞬間に如何なることが起るか、前以て知ることの出来ぬが常である。多少学術上の根拠を有する天気予報でさえ当らぬことが多い故、世間からは当るも八卦はっけ、当らぬも八卦はっけと同様に見做みなされて居る。されば今日の所では未来の予言は到底普通の人間には出来ぬことで、若し之を為し得る者があつたならば、其者は必ず人間以上の所謂予言者の類でなければならぬ如ごとくに思われて居る。

然しかしながら、未来のこととても、総すべてが全く予言の出来ぬもののみとは限らぬ。来年の暦に何月何日には日蝕が有つて、何時何分何秒に始まつて、何時何分何秒に終ると明記してあるが、それが必ず確たしかに当る。今年(一九一〇年)現われるハレー彗星なども幾十年も前から既に今年現われるべきことが天文学者には知れてあつて、今後また何十年目に再び現れ出ると云う事までが明かに解つて居る。他の方面に於て予言が総すべて不可能なる如ごとくに見ゆるに反し、天体に関してのみ斯かく正確に予言の出来るのは何故であるかと云うに、之は決して特別な秘密がある訳ではなく、ただ既往に於ける天体の運動を正確に測定し、其の運動を支配する法則を

探り求め、之を将来に当て嵌めて、予言するのみである。されば他のことととも、天文学で将来を推測するのと同一の方法によつて考えたならば、多少の予言の出来ぬことはない。我らが今此所に聊か人類の将来に就いて論ずるのは、決して予言者を以て自ら任ずる次第ではなく、単に天文学者が天体を観測し研究するのと同一の態度を取り、生物界の既往の変遷を調べ、それより生物各種の榮枯盛衰を支配する法則を探り求め、之を人類の場合に当て嵌めて、其の将来を推測しようとして試みたに過ぎぬ。天体の運動の簡單なるに反し、生物界に起る現象は極めて複雑であつて、到底数学的に計算は出来ぬから、時を指して予言することは素より出来ぬが、唯その進み行く方向と、終に達すべき終局点とだけは恐らく誤りなく推測し得るであろうと信ずる。之より先ず、人類が如何にして生存競争場裡に他の動物に打ち勝ち、今日見る如き優勢の位地を占め得るに至つたかを考え、次に地質学上の各時代に全盛を極めた諸種の動物が、如何にして一時斯かる勢力を得るに至つたか、また何故それが遂に亡び失せたかを調べ、それ等を基として人類の将来に就いて我らの推測する所を順次述べて見よう。

二

さて人類は他の動物に比して如何なる点が優つて居たので総べて他の動物に打ち勝つて、今日の位地を占め得るに至つたかと考えるに恐らく誰でも直に氣の附くことであろうが、それは思考力、推理力の器官なる脳髓の発達せることと運動の自由自在なる手有することとである。仮に人間の手に屈伸自在の指がなくて、其代りに馬や牛に見る如き蹄が着いてあつたと想像して、それでも人間が今日の位地まで達し得たであろうか、否かと考えれば、人類の進歩に取つて手が如何に欠くべからざる物であつたかが直に知れる。手に指が

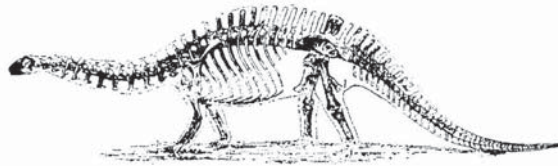
なかつたならば、第一、物が握れぬから如何なる簡単な器械をも使う事が出来ぬが、若しも人間に器械を使用する能が無かつたならば、到底他の動物に優るべき目醒ましい働きは出来なかつたに違いない。人間が他の動物に打ち勝つたのも、文明人が野蛮人を征服したのも全く器械の力に依るのである。人間の外にも幾分かの器械を用いる動物が全くない訳ではないが人間の如くに一から十まで器械ばかりを使うものは他にない故、実に「人間は器械を使う動物なり」と云う定義を下しても差支えはない。また脳髓の方が充分に発達しなかつたと想像すると、此の場合にも人間は決して今日の位地に達し得なかつたに疑ない。凡そ如何なる器械でも、之を用いるに当つては手を使うと同時に必ず脳をも使うもので、器械を造るに当つては更に多く脳を用いる。脳で工夫した器械を造つて使用して居れば、手はその為に漸々熟練して益々精巧に働き得る様になり、手を働かして経験が積れば脳はそのため更に進歩して前よりも一層よく考え得る様になり、両方で相助け合つて、両方ともに益々発達する。脳の思考力、推理力が進めば、自分に比して遙に筋肉の強いもの、感覚の敏いもの、爪牙の鋭いものに対しても智力によつて容易に打ち勝つことが出来るが、人類が他の動物に打ち勝つたのも、文明人が野蛮人を征服したのも総べて此の方法に依つたのである。元来如何なる器官でも突然一足飛びに発達するものではなく、必ず其の履むべき順序を経て漸々進み来るもので、人類の脳なども手と器械とに依つて獲得する経験の重なるに随つて発達したのであるが、之と大關係の有るものは、言語である。今日の所では言語を有する動物は人間のみである故、或る人が「人は言語を有する動物なり」と云う定義を下したのも尤もである。通常言語は口で云うものの如くに見做されて居るが、実は口は単に言語に必要な音を発するだけの器官であつて、真に言語を使う器官は脳であるから、我々は常に脳で物言うて居ると云うた方が寧ろ正しい。言を換えれば、言語なるものは脳の働きに使う器械であつて、手が種々の器械を用いて働く如くに、

脳は言語を用いて働くのである。器械も初めは石斧や石棒の如き粗末なものであったのが、終に自動車やライノタイプなど頗る精巧なものが出来た如く、言語も初めは至って粗末なものであったのが、漸々進歩して精巧なものとなり、脳は其の精巧な言語を使うて、益々推理の力を進め智力を増し、何事をもよく工夫して、終に他の諸動物に打ち勝つて今日の優勢なる位地に達したのである。

人類の起りを想像するに、恐らく今日より何百万年か何千万年かの昔に其頃生存して居た猿類の中の或る一種が樹上の生活より地上の生活に移り、後足のみで体を支え直立して歩み、斯くして自由になった前足を用いて簡単な器械を使い始め、或は石を拾うて敵に投げ、或は枝を折つて敵を防ぐべき棒となし、或は石を打ち合せ、割れて鋭い刃の生じたものは之を斧または刀として用い、小さい片は鏃として矢の先に結び付け、石を打ち合せ或は木を摩り合せて居るとき偶然火を発する事を屢々経験する間には、遂に自由に火を造る方法を覚え、随意に火を用い得る様になった以上は、之によつて土器を焼くことも出来、次には鉱物を熱して青銅、鉄さえも採つて、種々の武器を造り得るまでに進むであろうが、此の程度まで進んだ以上は、最早人類の敵として恐るべきものは一つも無く、自分に危害を加える獣類は悉く退治し、自分の種属は漸々蕃殖して全世界に拡がり、終に戦と云えば人類相互の戦のみを意味する今日の有様までに進み来つたのであろう。また斯く手を用いて為ることが進歩する間には、経験の重なるに連れて、脳の働きも速かに発達し、終には困難な無形の事柄をも抽象的に思考するまでに進み来つたのであろう。我々人類は斯くの如く脳と手との働きに依つて、今日占め居る位地までに達したのであるが、さて今後は如何に成り行くであろうか。

三

「歴史は繰り返す」と云う諺がある。之は恐らく時の古今を問わず同じ原因があれば必ず同じ結果が生ず



中世代の大蜥蜴アトラントサウルス

ることを云うたものであろう。然らば或る事の将来を論ずるに当っては、嘗て既往の歴史中に起った似寄りの事件の成り行きを調べて、参考し比較する事は甚だ必要である。今人類の将来を論ずるに当つても、先ず人類より以前に此の地球上に全盛を極めて居た各種の動物が、終に如何なる運命に遇うたか、また何故その様な運命に遇うたかを詳しく研究して参考せねばならぬ。

人類以前に地球上に全盛を極めて居た動物の例を挙げれば、古生代に於ける魚類、両棲類、中生代に於ける爬虫類、第三期に於ける獸類などである。此等は各々その時代に於ては、恰も今日の人類の如くに絶対に優勢なる位地を占めて、仮にも之に敵し得る動物は決して他に無かつた。特に中生代の蜥蜴類の旺盛を極めて居た勢は殆ど想像も及ばぬ程で、近頃発掘せられた化石のみに就いて見ても北アメリカから出たアトラントサウルスという蜥蜴などは体の長さが十六間(約二九メートル)もあつて、今日の最大の鯨よりも更に大きい。こんな動物がうろうろと陸上を匍い廻つて居たときの實際の様子は如何であつたらうか。また其頃の海の中にはイクチオサウルス、プレシオサウルスなどと名づける鯨のような大きな蜥蜴類が無数に游いで居た。また空中には翼を有する蜥蜴類が沢山に飛んで居たが、其の中で、プテラノドンと云う種類などは翼を拡げると三間半(約五・四メートル)もあつて、今日最大の飛ぶ鳥なる南米のコンドル鷲に比べて殆ど三倍も大きい。斯くの如く、其の時代に於ては陸上を走るものも、水中を遊ぶものも、空中を翹けるものも悉く蜥蜴類のみで、聊かでも之に匹敵すべき動物は他に無かつたのである。次に第三期に於ける獸類もその通りで、単に身体の大きさのみに就いて云うても、チノテリウムと称する象類の如きは頭骨だけでも長さが一間(約一・八メートル)近くある。マケロプスと云う虎には牙

の大きさが殆ど短刀ほどあり、鹿には左右の角が二間(約三・六メートル)以上に拡がったものがある。されば此の時代に於ける獸類は中生代の蜥蜴類と同じく、如何なる動物が出て来ようが到底亡ぼされる如きことは夢にも有り得べからざる勢であつた。然るに其の成り行きは如何と見ると、中生代の大きな蜥蜴類も、第三期の恐ろしい獸類も、両方ともに實際に於ては忽ちにして亡び失せ、次の時代には殆ど全滅の姿と成り終つたのである。



第三期の巨獸ギノテリウムの頭骨

一時絶対の優勢を占めて向う所全く敵なしとも云うべき有様にあつた此等の動物が、何故に忽ち衰え亡びるに至つたかは、大に研究すべき問題である。此の問題に就いては、古生物学の書物にも何も論じてなく、生物学者等の間には何の説もない様で、普通には唯これ等の動物よりもお一層優つたものが現われた為に、生存競争に敗れて亡びたのであらうと簡単に思われて居るが、我らの考えでは此の問題は斯様に簡単に解決せらるべきものではなく、更に深く研究を要する。第一、既に優勢の位地に立つて居ると云うことは、生存競争上その動物に取つて大に有利な点である故、仮に同等の競争者が現われたと想像しても、決して容易に負ける理由はない。一種の動物が絶対に優勢の位地を占めて居る以上は、残りの動物は之に比して悉く劣等の位地に立つて居ることは勿論であるが、今まで劣者の位置に立つて居たものの中から或る一種が突然急速力を以て進歩し、今まで絶対に優勢を保つて居たものを追い越し、忽ち之を全滅せしめると云うことは容易に有るべき事でない。山が海となり、海が山となって天地も覆るかと思ふ様な大変動が地球の表面に起つた場合はいざ知らず、斯かる天変地異が無い以上は、其時の劣者の中から、其時の最優者を忽ち亡ぼすべきほどの力を有するものが現われようとは容易に信ぜられぬ。

然らば前に述べた如き一時全盛を極めた動物種属が何故に忽ち滅びたかと云うに、我らの考によれば、其の動物種属自身の内に、自ら滅亡すべき原因が生じて此の原因が内から働くのと、外から攻める敵の力とが相合して遂に之を滅亡せしめたのである。

凡そ物が亡びるには二通りの原因がある。一は外に在つて外から働く原因で、他は内に生じて内から働く原因である。我國の歴史に就て見ても、平家が亡びて源氏が興つたのは、決して平家が引続き健全に発達して優勢を占め居るべき筈の所へ、源氏が更にそれ以上に優つたものとなつて、競争の結果これを倒したのでない。若しも平家に内から亡びるべき原因が無かつたならば、競争上遙に不利益な位地にあつた源氏が、後より之を追い越して倒す望みは到底無かつたであらう。彼の驕れる平家が久しからずして亡びたのは、平家の亡びるべき原因が既に内から働いて、最早危く成りかかつた所を源氏が外から突き倒した故、恰も内部の朽ちた枯木が些細の風にも倒れる如くに、容易に亡びたのである。常に生存競争の劇しい世の中にあつては、如何に一時優勢を保つた動物でも、内から亡びる原因が働いて、其の運命が傾いて来た場合には、今まで劣等の位地にあつたものの為に、忽ち倒されてしまうことは当然である。中生代に天下を我物顔に横行したイクチオサウルスやプレシオサウルスが僅に一時代限りで滅び失せたのも、第三期の恐るべき猛獸、驚くべき巨象が暫くで全く死に絶えて後に子孫を遺さぬのも、全く平家の亡びたのと同様の理由に基づくのである。

一時絶対の優勢を保ち得た動物種属を内から働いて滅亡せしめた原因は何であるかと云うに、我らの見る所によれば、何れの場合にても必ず初め其の種属を急に勃興せしめた原因と同一のものである。之は一寸間くと甚だ不思議に思われるであろうが、少し詳しく調べると其の理由が明かになつて来る。凡そ何事でも一利あれば必ず一害あるは免れ難い事で、人の伝記などを読んで見ても、同一の性質が其人の長所であると同

時に、また短所でもあると云うような文句を往々見るが、動物の有する諸種の性質にも之と同様なことがある。或る動物は体の大きく筋肉の強いことに依つて他の種属に打ち勝ち、或る動物は武器の鋭いことに依つて他の種属に打ち勝ち、其他それぞれ異なつた方面に他に優れた所があつた為に、優勢の位地に達し得たであろうが、仮に身体が大きく力が強かつた為に他に打ち勝つた動物に就いて見るに、体の大きく力の強いと云うことは確に生存競争上他の動物に勝つに都合の好い性質ではあるが、また生活に多量の食物を要すること、成長に多くの年月を待たねばならぬこと、蕃殖の遅かるべきこと、働作に敏捷を欠くこと、其他なお種々の不利益なことが必然に附帯して来る故、一定の度を超えれば、体の大なることは却つて生存競争上に都合が悪くなる訳である。また牙や角の大きく鋭いことは之を用いて敵を倒すには無論極めて有利な性質であるが、之とても、牙や角だけが単独に発達し得るものではなく、之を載せるための頭骨、顎骨も、之を運用すべき筋肉も、其の筋肉を養うべき血管も共に発達せざるを得ぬ故、牙や角が大きくなれば、それだけ、其の動物の負担が重くなつて、之も一定の度を超えると、恰も不相当に多くの海陸軍を造つた貧乏国が、武器を維持するために重税を課する結果として、総べて他の方面が疲弊し、終には国全体が衰えざるを得ぬ如くに、やはり生存競争には却つて不適當なものと成つてしまふ。凡そ或る性質を備へたるが為に総べて他の種属に打ち勝つて、絶対に優勢の位置に進んだ動物は、後には更に其の性質を用いて相互に競争するを免れぬもので、筋力で天下を取つた種属は後には自己の種属内で相互に筋力を以て争い、牙で優勢を占めた種属は後には自己の種属内で相互に牙を以て闘う故益々体の大きなもの、牙の強いものでなければ生存することが出来ず、斯くして初め其の種属をして他に優らしめた性質は何所までも際限なく進まねば止まぬ有様となるが、前に述べた通り、如何に初め生存競争に都合の好かつた性質でも或る程度を超えると却つて生存競争に不利益な

ものとなり、且つ^か身体が或る一定の生活法に適する様に専門的に遠く変化すると総^すべて他の方面には、それだけ不適當なものと成らざるを得ず、随つてそれだけ融通の利かぬものと成り、終^{つい}に生存競争上不利な位地に陥つて、漸次^{ぜんじ}他の種属のために滅されるに至つたのである。

以上述べたことを尚^{なお}詳しく論ずれば、多くの実例を挙げて証拠立てることが出来るが、斯^かくては余り専門学の範圍に深入りすることと成る故、此所^{ここ}には略する。ただ我らの考えの要点を述べれば次の如^{ごと}くである。即ち地質学上の各時代に優勢の位地を占めて居た諸種の動物が後に至り忽^{たちま}ち亡び失せたのは、決して単に他の種属のために攻められて敗けた訳ではなく、寧^{むし}ろ其の亡びる原因が内部に生じたのに因るのである。然^{しか}して、其の内部に生じた原因と云うのは、即ち初め其の種属をして総^すべて他の動物に勝つて優勢の位地に達せしめた原因と同一のものである。シャミセンガイやオウムガイの様な何所^{どこ}の隅に生きて居るか分らぬ程の微々たる生活を営んで居るものは、却^{かえ}つて古生代から今日まで引続いて細長く生存して居るに反し、一時急に盛になつて、暫^{しばらく}くは絶対に優勢を保つて居たような動物が、悉^{ことごと}く次の時代に滅び失せたと云うことは、我らが此所^{ここ}に述べた如き原因によると考えるの外には到底説明の仕様は無^ない様である。

斯^かくの如^{ごと}く化石学上の例の示す所によると、一時地球の表面に優勢の位地を占めて居た動物種属は、何れも初め其の種属をして他の動物に打ち勝つて、優勢の位地に達せしめた其同じ性質が、やがて却^{かえ}つて禍をなして、その為に悉^{ことごと}く亡び失せてしまふたが、さて人類は如何^{いかに}であろうか。人類だけは独り他の動物とは全く違つて、人類をして、今日の優勢なる位地に達せしめた脳と手との力に依り、言語と器械とを使用して、今後も永久限りなく益々榮え行くであろうか。将^{はた}また他の動物と同一の法則に従つて、嘗^{かつ}ては人類をして他の動物に打ち勝たしめ、文明人をして野蛮人を征服し得せしめた其の脳と手との働きが、やがて却^{かえ}つて禍をな

して、人類をして、恰あたかも空に向うて投げた石が落ち来るときの如ごときパラボラ線線(放物)を画えいて一刻毎に速力を増しつつ滅亡の運命に向うて進ましめ居こる如ごときことは無いであらうか。

四

前に述べた通り人類が今日の有様までに進んだのは、全く言語と器械とを用いて働く脳と手との力に因つたものであるが、此の力の発達に伴うて如何いかなる事が起つたかと云うに、凡おほそ器械を用いる以上は所有權と云うものが生じ、財産なるものが現われ、同時に財産を貸して利子を取る制度も起るが、其の必然の結果として、終つひに貧富の懸隔が甚だしくなり、富める者は益々富み、貧しきものは益々貧しく、一社会の中に、遊びながら贅沢の極を尽す少数の極富者と、如何いかに働いても生活に必要な衣食さえも充分に獲られぬ無数の極貧者とを生ずるに至る。西洋諸国では今日既に此有様に達して居るが、世の進むに随したがひ此傾向は益々烈しくなるに違ちがひない。金の有り余る富豪と、生活の爲には如何いかなる恥をも忍ぶ貧民とが並び存すれば、其間に宜よろしからぬ現象の起るは当然の理で、之のみでも世道の頹廢、人心の墮落の原因としては充分である。

富者の華美な生活を見、金力によつて殆ど何事をも為し得たることなき有様を目撃する多数の人々が、同じく一生を送るならば我も斯かくの如ごとくにして暮くりたいと思おもうは無理ならぬこと故、世間一般にただ金錢にのみ重きを置く様になり、如何いかなる苦しみを忍んでも金錢を溜めようと決心する事を奮発と名づけ、何等かの方法に依つて金錢を溜め得たことを成功と称し、父兄は行末を思おもうて子弟に奮発を強い、雑誌は成功者の例を挙げて盛に青年を煽動するゆえ、益々金錢のための競争が劇まげしくなるが、一人をして富豪ならしめる爲には、数万人が貧苦を忍しのびざるべからざるは計算上明かである故、總すべての奮発者が、悉こく成功することは到

底望むべからざることで、実際には其の多数は何時までもただ劇しい競争を続け、苦しみながら遂に一生を終るのである。肉体の慾には何れも際限があるが、金銭に対する慾には際限が無いから、富者は其の生存競争に有利なる地位を利用して、更に富を増そうと努め、貧者は益々之に苦しめられ、終には毎日朝から晩まで牛馬の如くに働いても、生存に必要な食物、衣服さえ充分に獲られぬ程になる。要するに、今後は貧富の懸隔が益々甚だしくなり、一度貧困に陥つたものは如何に奮発しても容易に頭を上げることが出来ず、金銭のための競争が何所までも劇烈になつて、従来の道義や人情を顧みては居られぬ様な世の中に成り行くものと思わねばならぬ。

また人間は何事にも器械を用いる結果として、生活が次第に自然の状態に遠ざかり、火を点じて、夜も明るくし、炭を焚いて冬も暖くする。更に進んで夏も氷を造り、電気扇を回転せしめて暑を防ぐが、斯く器械の力に依つて天然に反した生活をするると身体は次第に天然に対する抵抗力が減じ、段々懦弱になつて、僅の寒暑に曝されても直に病気に罹るようになる。西洋人が靴下を脱ぐと風を引くと云うて恐れるのは既に其例である。また火を用いて食物を煮て食う様になつてからは剛い物を噛む歯の力が漸々減じて、歯は弱く且悪くなる。野蛮人に比しては文明人の方が一般に歯が弱く、同じ国の内では下等社会よりも上等社会の方が一般に歯が悪いことは歯医者がよく知る所である。料理の法が進めば胃がそれだけ弱くなつて、終には食時毎にタカジアスターゼ（一九〇九年高峰讓吉が創生した胃腸薬の商品名）を飲まねば飯が消化せぬ様な人も生ずる。出産の如きも元来普通な生理的作用であるから決して困難な筈なく、獣類の牝に出産の際に同僚の助けを求める者のないのは無論のこと、人類でもアフリカやオーストラリアの土人は妊婦が旅行中に出産する場合には暫時同伴者と離れ、藪蔭で出産を済ませ、傍の小河で幼児を洗うて、直に自分の背に乗せ、早足で同行者に迫り附いて、平気で

旅行を続けるが、本来かく軽便であるべきものが、文明国になると、生死にも関する大事件となり、必ず産婆、看護婦産科医者の助けを借りなければ産めぬ事に定まり、其上に難産の割合が次第に増して行く。斯く身体が段々弱くなつて、防寒具、避暑具、防湿具、頸巻、手袋、耳覆い、呼吸器、塵除け眼鏡、ゼム、清心丹(明治八年に発売された丸薬の漢方処方胃腸薬)、タカジアスターゼ其他種々雑多の物の中、何か一つ欠けても忽ち病に罹るようになる。成れば、生命を保つに必要な物の品数が非常に多くなり、それだけ生活費が高くなつて、生活難が度を増し、生存の競争になお一層の努力を要することに成る。特に葬式に其の日だけ看護婦を傭い込んで、車で供をさせる程に虚栄心に満ちた人間が、富豪の贅沢な生活を常に目の前に見て居るのである故、幾らあつても尚その上に金銭の不足を感じ、一にも金銭、二にも金銭と唯それのみを思い煩うて一日も安んぜぬ様に成るに違いない。

生存競争が劇甚となつて、烈しく競争せねば自分の生存が危いと云う不安の念が一刻も念頭を離れぬ様になると、無意識的に競争して居たときは違い、唯それだけでも甚だしく神経を刺戟するが、人間が便利或は娯楽のために造る器械も、また烈しく神経を刺戟するもの計りである。今日でも一寸外へ出れば直に電車か汽車に乗るが、其の喧しい響きは聴神経を通じて強く脳の中樞を刺戟する。慣れると余り喧しく感じなくなるが、之は唯その響が意識に入らぬだけで、實際耳と神経と脳との刺戟せられて居ることは毫も減じない。活動写真(映)を見る人は単に画が動く如くに感じて居るが、實際は一秒に十回以上の割で劇烈な光と暗黒とが交る交る眼の網膜と視神経と脳とを刺戟して居るのである。斯く神経系に対する刺戟が多過ぎるために神経は次第に衰弱し、其の働きが過敏となり、病的となつて些細な事をも甚だしく気に掛け、僅なことも非常に心配し、少しく逆境に立つと忽ち失望落胆し、或は自暴自棄となつて、軽々しく自殺し、若くは重

罪を犯すようになる。今日でも統計の示す所に依ると、精神病者、自殺者、犯罪者の数は一年毎に増して行くが、今後は其の原因が増加するに随い、更に一層甚だしくなるものと覚悟せねばならぬ。

また教育が進んで脳の働きの発達すると、万事自身の智力で判断し識別する力が増す故、若しも社会に不条理な制度が存在するときは忽ち之に気が付き、劇しく其の不都合を感じ、其のために不利益な位地に立つて居るものは堪え難い不平を起すに至る。無智の野蛮時代や半開時代には何様にかして餓えず凍えず、安全に暮し得るものは、それで満足して、貧乏な自分の隣りに富裕な人が稍々贅沢に暮して居ても、各々その分である如くに心得て、敢えて何故に彼と我との間に斯くの如き貧富の差があるかと考えもせぬが、世の中が進み、知識が開けるに随つて、何事に就ても其の理由を知ろうと欲し、若し不条理極まると思ふことを発見した場合には、之に対して不平、不満の念を禁じ得なくなる。我よりも体格脳力ともに慥に劣つて居る彼が、何故社会に於て我よりも上に位して居るか、我れが毎日衣食を得るために斯く苦しみつつあるに、彼は何故、快樂に耽りながら安らげく世を渡つて行くか、正直に働く我一顧をも与えざる世間は、何故に強慾不正なる彼を斯くまでに尊敬するかと考へては、益々劇烈な不平が起り、過多の刺戟のために神経が過敏になつて居るところへ此の不平の念が現れるから、愈々我慢が出来なく成る。今日の虚無党と云い、社会党と云い、無政府党と云うは、何れも此の不平の為に生じた結社で、西洋の文明国には一国として此類のもの無い所はないが、不平の原因の消滅せぬ間は、今後も益々盛に蔓るものと思わねばならぬ。また此の不平と、生活難と、世間からの圧迫とが一度に重なり合うと、鬱憤の余り如何なる蛮行をも敢てする輩が続出する。今日までも暗殺、謀反等が屢々行われたが、今後はなお一層頻繁に起るに違いない。

野生の動物には生存競争の結果、常に自然淘汰が行われ、筋肉体力の劣つたもの、感覚の鈍いもの、其他、

生存に不適當のものは亡びて、適者のみが生存する故、生存に適する性質は代を追うて僅かづつ発達し、決して退歩することは無いが、人類には、何物とでも交換の出来る貨幣が流通する様に成つた後は、自然淘汰の働きが中絶した。人類に於ても生存競争が劇烈で、敗者は生存が出来ぬのであるから、確に一種の淘汰が行われて居るには違いないが、今日人類の生存競争に於て勝敗の定まる標準は必ずしも身体の勝れたこと、精神の優つたことではなく、多くは全く別種の関係から勝敗が決する故、常に極めて劇しい生存競争がありながら、優者のみを生存せしめると云う淘汰は起らぬ。身体も健全で智力も相応に発達した者が貧に迫つて自殺することもあれば、病身な愚物が医者と看護婦とを備い得る金銭の力で、無事に生存して子を遺すこともある。立派な人間に育つべき體質の嬰兒がただ貧家に生れた計りに、栄養不良で夭死することもあれば、両親の何れに似ても碌な者には成りそうもない月足らずの児が、贅沢な定温哺育箱の助けに依つて安全に成長することもある。斯くの如く今日の人類には身体の健全と、精神の優秀とを標準とした淘汰は全く行われぬが、淘汰が止めば其時まで淘汰の標準であつた点が直に退化し始めるのは、生物学上動かすべからざる確な事実である。暗黒な洞の内に在つて眼の優劣を標準とした自然淘汰が無いと、其の動物の眼は次第に退化する。追い掛ける獣類の居ない所に住んで、飛ぶ力の優劣を標準とした自然淘汰が無いと、其鳥の翼は次第に小さく弱くなる。アメリカの大洞内に居る盲魚や、ニュージーランドに産する無翼鳥は斯くして出来たものである。されば人類も肉体及び精神の優劣を標準とした淘汰が行われぬ結果、両者ともに漸次退化すべきは数の免かれざる所で、今後は必ず著しく退化の現象が現われるであろう。現に今日でも西洋諸国では既に人類の退化現象の少なからぬに気が付き医者、法律家、社会学者などが集まつて、喧しく之を論じ、其ために専門の機関雑誌をも発行して、之を防止する方法を講じて居るが、淘汰の行われぬ限りは退化は止むを得

ぬ故、到底致し方は無いのである。

以上略述した通り、人類は初め諸動物に打ち勝つ際に、大に役に立つた脳と手との働きの、其後何所までも発達した為に、其の必然の結果、生活が自然の状態に遠ざかつて、身体が弱くなり、貧富の懸隔が甚だしくなつて、生存競争が烈しくなり、神経は衰弱し、不平は増進して、世道人心は益々墮落するの外なきに至つたが、此等は総べて広い意味に於ける退化の現象に属する。今日とても既に世道の廃頽、人心の墮落を歎く人は幾らもあるが、其の原因が人類自身の性質の内部に起つたものである以上は、今後も引き続いて同一の方向に進むであろう。さて斯かる退化の現象が今日以後、更に歩を進めたならば、人類の身体上、精神上、社会に如何なる変化を生ずるであろうか。之は我々が今から慎重に研究して置くべき大問題である。

五

先ず生活の困難、人心の墮落が今後身体上に如何なる結果を生ずべきかを考えるに、第一に影響を蒙るのは性欲に関する方面である。生活の費用の高まるに随い、結婚して一家を支え、妻子を養うことは段々容易でなくなり、相応の資産を造つた後でなければ結婚が出来ぬ所から、自然に晩婚の風が生じ、中年以後まで結婚せぬ者も段々多くなる。然るに性欲は人類自然の肉慾の中で最も力強いもので、青春燃ゆるが如き時期に当つては、到底理性に依つて冷かに制御し得べきものではない。それ故、公に結婚の出来ぬ場合には、何等か他の方法に依つて其の満足を求め、其の結果として裏面の風儀が次第に乱れるは止むを得ぬ。亦女子は身体の構造上、資本を要せずして金銭を儲け得べき方法が備わつてある故、生活の困難な場合、若しくは虚栄心を満足せしむべき金銭の不足を感じずる場合には、暫時肉体を貸して之を補おうとするに至り易い。甚し

きに至つては学校の授業料を得んが為に、密かに稼ぐ女学生までも出来る。斯くして公然の結婚に依らずして性慾の満足を得べき簡便な方法が到る所に出来る上は、青年は悉く之に依つて満足を求め得て、晩婚は素より一生独身で暮す男子も多くなり、今日でも西洋諸国では既に、嫁ぐべき相手が無いために、抛なく独身で暮す女子が非常に沢山にある。斯様な世の中になれば梅毒、痲病、軟性下疳などの花柳病(性病)が忽ち拡がつて止まる所を知らぬであろうが、梅毒は甚しく身体を弱くし特に神経系を犯せば麻痺性痴呆などと云うて、長くても二三年で必ず死ぬ恐ろしい精神病を生ずる。その上、梅毒は必ず子孫へ伝わる故、この病が世の中に蔓延すると、一代毎に一般の健康が衰えるは云う迄もない。先年ドイツ国ベルリンの大学で学生中に花柳病に罹つて居ない学生の稀なるを知つて大に愕き、特に講義を開いて花柳病の恐るべきことを学生に説き聞かせた。性慾の発動を講義に依つて停止することが出来たか否かは知らぬが、性慾に基く病が確に世の進むと共に勢を得て益々拡がり行くは疑を容れぬ。西洋人が「開化(Civilization)は梅毒化(Syphilisation)なり」と云うのは全く實際に的中した言葉である。

また公に結婚する者も、生活難の増すに随い、其の目的が一変して、従来(ごと)の如く清き家庭を造つて、健全なる後継者を産み育てる為ではなく、男は富者の娘を娶つて出世の手掛りと為ようと図り、女も富者に嫁して、生活難の心配なく且つ榮耀に世を送ろうとするから、随つて結婚の自然の結果なる妊娠を嫌い、あらゆる方法を考へて之を避けようとする。性慾の満足は家の内外に求めながら、子を育てる面倒を免れようとする者が増加すれば、一般の産児の数が漸々減少するのは当然のことで、現にフランスの如きは、其ため国力の衰える虞があるので、種々その救済の方法を講じて居る。また児を産んでも、其の養育を人手に委せて、自身は樂を為ようとする女が多くなると、乳を分泌する性質が退化して、西洋では今日既に児を産んでも乳の出

ぬ女の数が年々多く成つて居るが、今後は此の現象も更に進むであろう。

人類の生活が次第に自然の状態に遠ざかるに随い、身体が漸々薄弱になり、神経が過敏になることは前にも述べたが、生存の競争が劇しくなるに伴うて、自分の生存が何時危くなるかも知れぬという心配が瞬時にも念頭を離れぬと、常に不安の念に堪え得ず、漸々苦悶の状態に陥り、若し何等かの手段に依つて一刻でも圧迫の烈しい現実世界を忘れて、借金取りも鶯の声に聞える夢幻の境に遊ぶことが出来れば、之を無上の快樂と感ずるに至る。酒や煙草が到る所に盛に用いられるのは其のためである。初めて文明人に接触した野蛮人が、何よりも先ず酒と煙草とを欲しがるとも、恐らく無意識的ながら、器械を用いて責めて来る文明の圧迫を暫時だけでも忘れたい為である。酒も煙草も有毒な成分を含むで居る故、多量に続け用いると中毒を起す。酒精の中毒によつて震戦性譫妄症に罹り、煙草の中毒によつて視力を鈍衰することは世人の知る如くであるが、更に恐るべきは子孫の體質を害することである。医学上の統計によると精神病者、低能者、體質異常者は殆ど悉く其の父母もしくは祖父母等に酒客を有するものである。然し酒と煙草とは極めて重い税を課して、経済上容易に飲めぬようにして外部から強制的に防ぐことも出来、また煙草には製造者が如才なく芋の葉や蓮の葉を乾して刻み込むから、其の害毒は或は恐れるに足らぬかも知れぬ。

世の開けぬ中は農産物が其ままで直接に消費者の手に渡る故、飲食物に混ぜ物が無いが、製造工業が盛になると飲食物も一ヶ所で多量に製造し、一時貯蔵して置くために防腐剤を加えることもあり、また法外の儲を得ようとして、容積重量を増すために種々の物を混ざることもある。酒にサリチル酸を加え、砂糖、餛飩粉に房州砂を混ぜ、醬油にサツカリン（人工甘味料の一種。同じ人工甘味料のズルチンととも）を入れることなどは今日既に盛に行われて居るが、これ等も長い間には少しづつ身体を害せぬとも限らぬ。

また製造工業の發達に伴い、人の仕事が多々細かく分業的になつて、身体の働きも一方に偏する様になり、耳を用いる職業の者は耳のみを過度に用い、眼を使う職業の者は眼のみを過度に使い、其ため各職業に固有の病も出来て来る。其上に職業によつては年中絶えず綿屑を吸い込むとか、塩酸の煙を嗅ぐとか、自然の生活には決して無い有害物に触れる故、之によつても身体は漸々ぜんぜん、悪くなる。田舎が衰微して都會が盛大になる程、この害の範圍は廣くなり、其の結果も著しく現われる。

六

以上は主として不自然の生活より起る身体の退化を述べたのであるが、次に智力の進歩に伴うて精神上に如何なる変化が生ずるかと考えるに、教育が進み知識が増せば次第に何事に就いても其の理由を知ろうと欲し、且つ自身の判断力に訴えて其の当否を鑑別しようと試みる様になり、従来ただ他動的に教えられて其ま信じ来つた事に対しても疑を挟む様になつて来る。之は従来単に、知識上の權威に服従して居たのが、其の支配から脱して独立に考え様とするのであるから、精神的解放とも云うべき事で、其の結果として總べての方面に懷疑の念が生ずる。其中で精神上に最も著しい影響を及ぼすのは道德上に関する懷疑である。尤も金錢の遣り取りに忙しい多数の人々は従来とても、ただ習慣に従うて行動するだけで、道德上の議論などは丸で眼中に置いて居なかつたし、また今後とても、多数の人々は實際の生存競争に追われて、此様な問題を考へる暇も無く世を渡るであらうが、少しく學問でもする人は道德の説く所と目前の事実とを対照して疑を挟まざるを得ぬ様になる。例えば書物には善人は終ついに榮え、悪人は終ついに亡びる如くに書いてあるが、實際には貧富の懸隔、生存競争の劇甚のために、善人が亡び悪人が榮える方が却かえつて多い様に見え、正直に一生懸命に

働いて居た者が不意に災難に遇うて悲惨極まる境遇に陥ることもあれば、不正直な横着極まる事をして莫大の財産を造つたものが、自分一代は云うに及ぼず、孫の代まで富み榮えて居る例もある。積善の家が忽ち断絶して、積悪の家却つて余慶のある事もある。斯様な事実を目前に見ては、道德とはそも何物であるかとの疑念が起るは当然で、「善は善なるが故に為すべし、悪は悪なるが故に為すべからず」と云う如き不得要領な説法には到底承知が出来なくなり、従来の道德は根柢から改めて吟味せねばならぬとの観念が浮ぶ。一方で理論上道德に関して疑を抱く者の生ずる間に他方には更に一步を進めて、實際の処世上、道德なるものを安く見縊り、自分一身の損得から打算して、生存競争上、道德に従うを利とする場合には道德を尊重し、道德を破るを利とする場合には道德を捨てて顧みぬ輩が多数に生ずる。西洋諸国で、他の方面の道德が甚しく衰えたに拘らず、商業上の道德が堅く守られて居るのは斯様な動機から起つたことであるから、これを以て他の方面の徳義を測るの標準とすることは出来ぬ。人心が斯かる程度に達した上は、道德が彼等に対して何の威厳をも保ち得ぬは勿論である。

生存競争が烈しくなれば、目的のために手段を択んでは居られぬ様になり、不正な事も聞き慣れては日常の如くに思われ、一旦成功さえすれば、世間は其の光輝に暈まされて、如何なる手段に依つたかは忘れて問わぬ。斯かる例が無数に現われるに随い、道德の価値は益々認められなくなつて、終には過去の時代に存した古物の如くに思われ、實際の生活には全く度外視せられるに至るやも測り難い。世には往々、今日は旧道德が破壊せられ、新道德が未だ定まらぬ過渡時代であるから、世道人心が多少混乱の状態にあるは止むを得ぬと説く人もあるが、以上述べた如くに考えると、所謂新道德なるものは、何を根柢として何時出来上るものであるか真に心細い次第である。

生活難の増すに随うて、往々宗教の叫び声が一時多くなることもあるが、我らの考えに依れば、之は決して或る人々の論ずる如き信仰の復活と見做すべきものでは無く、ただ競争場裡の不安の念に堪えずして何物にか掴み附いて慰安を求めようと試みるのであるから、恰も溺れんとする者が浮かんで居る藁にも掴み附こうとするのと同じであつて、無智の爺婆が安心して信仰して居たのに比すると全く趣が違ふ。人が地獄極楽をその儘に信じ得た時代には、宗教は風教の維持にも失意者の慰安にも有効であつたろうが、一旦智力が進んで懷疑の念を生じた者に対しては、到底多くの安心を与える力はない。特に他人を救う前に、先ず自分を救うべき必要のある今後の宗教家によつて、道徳が幾分でも維持せらるべきことは頗る望が少くない。

斯くて道徳も宗教も、今後は生活難と智力の増進に伴う懷疑、不安の念を鎮めることは出来ず、生存競争の方は一刻も休まず追い立てる故、人心はただ墮落の方向に進むの外に途なきに至るであろう。

七

人類が社会を形造つて生存して居る以上は、互に力を協せ相助けることが何よりも大切であるが、生活難の加わると共に人心が墮落すると、此事が次第に薄らいで行く。各個人の間の競争が劇しくなると、白分一身の生存を図ることに全力を尽してもなお不足を感じる程である故、勢い他を顧みることなどは出来なくなり、随つて何事を為るにもただ自分一身の利害損得から割り出して計画せざるを得ぬ様になつてしまふ。元來人類の如き協力一致の本能の頗る薄弱なるものには制裁を設けて互に相誡め、協力一致の破れぬようにする仕組が必要である。昔は道徳、宗教等に依つて多少之を為し得た。然るに今後は貧富の懸隔、知識の増進等に伴う利己の私慾主義が勢を得て、宗教道徳は共に衰えるの外はない故、ただ強制的に働く法律の外には、

人類に協力一致の働きを為さしめ得るものは無くなる。斯くなれば世は私慾と法律との競走となり、私慾は巧に法律の空隙を潜り、法網に触れずして大に儲け得べき方法を講究して実行し、之を防ぐ為には更に密なる新法律が造られ、法律の数は限りなく増すであろうが、錠前が改良せられる毎に盜賊の錠前破りも精巧になる如くに、法律が密になれば、それだけ之を潜る術も進歩し、私慾は相変らず総べての方面に盛に働き続けるであろう。

各個人が悉く私慾に依つて働く世の中になれば、協力一致を要する事業は素よりよく行われる望はない。たとい協力一致の外形だけは継続しても、其の内容は私慾の集まりと變つてしまう。例えば団体の自治の如きも、元來は多数の人々に適當と認められ選出された者が衆に代つて議員となるべきに、今後は私慾主義の跋扈するに随い、其の位置を利用して儲けようと思う者が、自分の方から候補者と名乗つて盛に運動し、うるさく選挙者に迫り、あらゆる手段を取り、時には兇器を持ち出してまでも、他を排して自分が当選しようと努める様になるに違いない。福沢氏が嘗て「世界国尽し」の中に「政体ありて主君なく、天下は天下の天下なり」と謳うた北米合衆国の人に云わせると、米国は共和政治と云う理想的の政体で、各個人は貧富上下の別なく、憲法によつて平等に政治上の權利を与えられて居ると云うが、今日既に上述の如き有様に進んで居る故、仮に自分がニューヨーク市の住民になつたと想像すると、自分の實際に有する政治上の權利は、ただ自分の好まぬ候補者を選むか、棄権するかかの二途の中、一つを随意に選び得ると云う權利のみに過ぎぬ。されば今後は協力一致を要する働きは漸々困難になり終には殆ど不可能になるやも知れぬ。

智力が進めば道徳に向うて懷疑を挟む様になると同じく、従來の伝説によつて存する社会の制度に対して、単に盲目的に服従して居らぬ様になり、批評的態度を取つて之に望むから、不条理なりと思うことに

は反抗の念を起さざるを得ない。単に祖先の御蔭によつて、愚劣な子孫が何時までも社会の上位を占め得る印度の世襲的階級制度などに対しては、第一に斯^かかる反抗の念が起るであろうが、之れが劇^{はげ}しく蔓^{はびこ}つて現在の制度を倒そうと試みる者が盛に現われては、社会の秩序安寧が破れる憂がある故、国を治める局に当る者が力を極めて之を押しやうとするのは無理もない。然^{しか}しながら斯^かかる思想は外部から圧して発表させぬ様にするには出来るが、心の中に思うことまでを防止することは出来ぬ故、今後は智力の進むに随い、なお一般に拡まるは免かれぬであろう。「泣く児と地頭には勝たれぬ」と云う諺も有つて、時の強者に反抗するは損である故、大抵の人は自身の利害から考えて、容易に公には名乗らぬが、西洋諸国では今日既に之に類する念は殆ど総^すべての人の内心に存する様に見受ける。なお此等に就いては論ずべき事が沢山にあるが、余り長く成るから止める。

八

人類の将来など云う問題は到底四十頁や五十頁で、詳^{つまびらか}に論ぜられるものではないから、此^こ所には素^{もと}より極めて大体の筋道だけを述べたに過ぎぬが、之に依つても人類が今如何^{いか}なる方向に進みつつあるかと云う事だけは多少明かに知る事が出来よう。即ち人類は其始め脳と手との力に依つて他の動物に打ち勝ち、絶対に優勢な位地を占めることを得たが、其の脳と手との働きの進んだ結果、今後は貧富の懸隔が甚しくなり、生活の困難が増し、身体は退化し、神経は過敏となり、不平懷疑の念が進み、私慾のみが盛になつて、協力一致の働きが出来なく成るべき運命を有するに至つたのである。人類の場合に於ても、初め生存競争上最も有効であつた其の同じ性質が限りなく発達して、後には却^{かえつ}て禍をなして、今後は滅亡の方向に進むの外なくなつ

たのであるから、彼の中世代のアトラントサウルスが初め他の動物に勝つ際に有効であつた体力が過度に発達し、終にはその為敏捷を欠いて滅亡したのと全く同一の径路を進みつつあると推測するの外はない。されば其の終局も地質学上の各時代に一時全盛を極めて居た他の諸動物と同じく、恐らくは次の時代までに略々全滅するを免かれぬものと見做すが適當であろう。

斯様に考えて見ると、今日の人類は恰も不治の病の初期に罹つて居る有様で、各民族は未だ軽いながらも到底全快の見込みのない不治の病人に比較すべきものである。一個人が不治の病の初期に罹つた場合には、他事を投げ擲つて安樂に静養する事も出来るが、地球の表面に於ける各民族は常に互に睨み合つて、僅の隙でもあらば相倒そうと待つて居るのであるから、専ら病を養うのみに掛かつては居られぬ。必ず外に向うては武備を固めて敵の侮を防ぎ、内は出来るだけの方法を講じて一刻でも病勢の進むことを止めて寿命を長くすることを務めねばならぬ。今後に於ける各民族間の競争は恰も不治の病人が相闘うて居る様なもの故、武備の劣つたものが先ず敗ける憂があるは明であると同時に、病氣の急に進んだ者も忽ち敵に倒されるは疑ない。されば各民族ともに全力を尽して、此の両方面に於て常に他の民族に優るように務めることが必要である。

小医は人を医し、大医は国を医すと云うが、若し人類の不治の病なる世道の廢頽を医し得る者があつたならば、これこそ大医の更に大なるものである。世は澆季(道徳が衰え人情が浮薄となつた時代)なりとは三千年の昔から絶えず人の云い來つたことであるが、其間に之を憂えて、世を救おうと志した人は素より多数に有つた。その中で死後の崇拜者に担がれて今日まで名を伝えられたものにはキリスト、孔子などがあるが、此等の人々の教えた事は根本は極めて簡単で且つ同一である。即ち「己の欲する所、之を人に施せ」若しくは「己の欲せざる所、之を人に施す勿れ」と云うことに帰着するが、此の訓えは実行が出来さえすれば、世道の廢頽も人心の墮落も

即座に撤回することが出来て、世は忽ち極楽浄土と成る筈であるから極めて結構であるが、惜しいかな今の世の中では実行が到底覚束ない。今日まで之に依つて世道人心の墮落を防ぎ得なかつたことは、過去の歴史の証明する通りであるが、今後とても同様である。生存競争の劇烈な世の中では、一刻でも他に先んじて此の訓えに従うた者は忽ち取り返しの附かぬ苦境に陥る虞がある故、一民族内の総べての個人が、一、二、三の号令と共に悉く打ち揃うて此の訓えを守る様になる時の外は到底その実行を望むことは出来ぬ。

根本的の治療法が無いとすれば、其他の方法を求めの外に道はないが、他の方法は今日既に文明諸国に沢山に行われて居る。養育院、感化院、孤児院、慈善会、出獄者保護会、安価食物供給所、無銭宿泊所、労働者養老金、貧困者慰問其他種々の救済法は皆この類である。此等は病の原因を除くのではなく単に現れた症状に対する療法である故、素より姑息なるを免れぬが、適当に行われれば、其だけの効は充分にあるべき筈である。時としてはトラスト征伐、累進的相続税法等の稍々外科的治療に類する方法が案出せられることもある。また身体の退化を防ぐためには、米国の或る州で現に行うて居る如くに、遺伝性の悪病患者には強制的に生殖を禁ずることも出来る。之に就て人権云々と論ずる人もあるが、斯かる論は足の先が壞疽に罹つて腐り始めたときに細胞権を云々して患部を切断することを躊躇するのと同様な迂論である。人類の過去に鑑み将来を慮れば、前に挙げた如き諸種の救済法は何れも今後益々奨励して出来得る限り協力一致の精神を失わぬように努めねばならぬ。これが、軍備の充実と共に、他の民族の間に介在して他の民族に敗けぬための唯一の手段である。

終りになお一言したいことがある。我等は一昨年の一月『中央公論』紙上に「所謂文明の弊の源」と題する一篇を掲げたが、其後或る人から斯様な論は読者をして悲観に陥らしめる患はないかとの注意を受けた。今

此所に述べたことに対しても或は同様の懸念をする人が無いとも限らぬが、我等は断じて左様な心配は無用であると考えるのである。

人間には一定の寿命があつて早晚死なねばならぬことは、誰も承知して居らぬものはないが、其のために悲觀に陥つたと云う人は嘗て聞かぬ。また此の地球は其の始め火の塊であつたのが、漸々冷却して固形の地殻が生じ、凹んだ所へ水が溜り、其の後諸種の生物が生じて、今日の有様までに進み來つた。今後は更に冷却して今日の月に見る如く、水は凍つて氷となり、土は凍つて石となり、空氣も凍つて液体となり、更に固形体となるであろうが、斯くなつては生物は到底生活は出来ぬ故、今見る如き生物は其前に総べて消え失せて趾を留めぬであろうとは、地球を論じた書物には悉く明記してある。また太陽と若干の稍々大きな遊星と無数の小遊星とより成る太陽系なるものも、其の初めは今日望遠鏡で實際幾つも見える如き星雲であつたのが、漸次凝固して今日の姿までに成つたのであるから、今後もお変化し続けるべきものである。其の上、太陽はこれに附屬する無数の星と共にヘルクレス星座の方へ非常な速力で進みつつあるとのこと故、終には如何に成り行くか分らぬ年々歳々何の変化も無い様に思うのは、人の命が短かいために変化を知るべき時間が無いからで、恰も大きな円の周辺の一小部が直線と異ならぬのと同じ理である。我等が此所に述べたのは、ただ人類は脳と手との働きの進んだ結果今日既に滅亡の方向に進みつつある故、地球が冷却して生物が全滅すべき時期を待たず、それより遙に前に滅び失せるであろうと予言したのみである故、従來人の云い來つたことに比して期限の少しく違ふ外には余り多く異つて居らぬ。盛者必滅とは常に人の唱え來つたことで、始めあるもの必ず終りあるは、これ生滅の法である。天長く地久しくとか、天地無窮とか、終り無き世とか云うのは梨子を「有りの実」と唱び硯箱を「当り箱」と名づけるのと同じく縁喜を祝う仮の言葉で、数日の後

には必ず枯れるに定まった松の切り枝を立てて常磐とぎわの榮を願う徴きざしとするのと同じ心持で常に唱えて居るに過ぎぬ。

総じて、来るか来ぬか分らぬ危害は、全く来ないものと見做みなし、来ることは確たしかであっても、其の来る時の定まらぬ危害は当分は来ぬものと見做みなして、氣に掛けずに生活して居ることが健康な人の常態である。汽車に乗つて旅行すれば何時衝突して顛覆せぬとも限らぬが、乗つてから降りるまで絶えずこれを心配して居る者は一人もない。また人間は老少不定と云うて何時死ぬか分らぬものであるが、毎日この事を考えて悲觀し続ける者は一人もない。斯か様なことを常に憂いて暮すのはただ幽鬱マヤ性の精神病患者のみである。されば万一この文を読んで悲觀に傾く人があつたならば、其の人は已すでに現時流行の神經衰弱症に罹つて居ると診断せざるを得ぬ故、我等は其の人に向うて、病勢の募らぬ内に速すみやかに療養に取り掛ることを切に勧告する。

(明治四十二年十一月)

- 『丘浅次郎集』（「近代日本思想大系」九、筑摩書房、一九七四年九月）所収。
- 読みやすさのために、旧かな遣いは新かな遣いに変更し、適宜振り仮名をつけた。
- 理解を助けるために適宜割注を附した。
- PDF化にはL^AT_EX_{2 ϵ} でタイプセッティングを行い、dvi_{ps}dfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。